

# 東京バッハ合唱団 月報

【第541号】2007年7月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.541  
July 2007

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## フライブルクで、松山で、東京で、Auf Wiedersehen!

打ち上げ会（松山，6月3日）での挨拶

大村 恵美子

ドイツ演奏旅行をしたとき、毎回の演奏ごとに、会衆にむかっただけの挨拶文を用意しなければならない苦労があったことを思い出して、今回もコンサートの当日、私は早朝に目覚め、打ち上げ会での挨拶を考えました。原稿を書いておいたのですが、パーティーでは最後に順番がまわってきて、その前にたくさんのスピーチがつづいていたので、私は原稿の前半を全部割愛して話しました。そこは、東京・松山・フライブルクの3バッハ合唱団のいきさつを述べたところですので、いま、この月報に、その部分をつけ加えてご紹介しておきます。

...

この地上を舞台として、人間の夢を実現させるという人生の目標をもつことにおいて、フライブルク、松山、東京の3つのバッハ合唱団は、共通したものをもっています。

そして今日のコンサートは、みごとにその実証を、同時代の多くのひとびとの前に示してくれました。おめでとうございます。

東京バッハが45周年、松山バッハが30周年を、《マイ受難曲》上演で祝うということは、10年ほど前にさかのぼって企画が始められました。

その前に、これまでの私たちの足跡をのこすために、カンタータ50曲の日本語版楽譜とCDの発行をきめて、それを5年がかりで完成させました。このたびの共演の機会に、ボイアーレ先生には、「50曲選」最後の8曲（BWV156、180、187、190、192、194、196、197）の楽譜と同曲収録のCDをプレゼントし、ボイアーレ先生からはフライブルク演奏のカンタータ BWV131、150、196と、モーツァルトの《レクイエム》その他のCDをいただきました。

そのあいだ、橋本さんは、東京バッハ合唱団との関係を保ちながら、松山市の姉妹都市フライブルクとの交流というすばらしい活動を育てあげ、2002年には、松山・フライブルク両バッハ合唱団の合同演奏という形での《口短調ミサ曲》公演を、広島と松山の2都市で成功させました。

そのときのコンサートは、私がはじめて聴いた松山バッハの演奏だったのです。それを聴いた夜に、ホテルで、

私は2007年予定の《マイ》を、松山バッハといっしょに歌い、できるだけ早い時期に、橋本さんに東京での指導者としても手伝っていただく、ということに着想したのです。

彼は、ほとんど即座にどれも引き受けてくださり、そのうえ2007年には、東京の《マイ》（3月）のあとに、フライブルクとの交流コンサートとして、松山でも、フライブルク・松山合同の《マイ》を実現させる、とお決めになりました。

私たちは長いあいだ、ドイツ語原詞でも練習していましたので、その松山での《マイ》公演に、可能なかぎり多くの東京のメンバーも歌わせていただきたいと申し入れ、結果的に、3月21日の東京バッハの定期演奏会には28名の松山メンバーが、6月3日の松山公演には、26名の東京メンバーも参加することになりました。

...

[以下は、当日にスピーチした内容です]

私たちの過去4回のドイツ巡演に、いつも中心になってお世話くださった、ベルリンのアジアミッションのグンドルフ・アンメ牧師が亡くなられて以来、ドイツをたずねる機会を失っていた私たちは、松山の方々の寛大なおはからいにより、こうして松山で、小規模のドイツ留学に参加させていただくことができたのでした。ドイツ本土での留学に劣らず、この短期間に、私たちはことばと形に表わせない、貴い体験をさせていただくことになりました。心より感謝申し上げます。

2009年には、私たちの友人、南吉衛牧師が、この4月に就任したシュトゥットガルトの教会および周辺で、いくつかのコンサートができるよう、今から3年がかりで準備をしてくださることになっています。シュトゥットガルトとフライブルクは近い！ なんらかの夢を、また私たちは持つことができないでしょうか。これが3月21日の《マイ》の成功で、ふたたび飛躍の力を得た東京バッハ合唱団の夢なのです。

フライブルクの皆さま、松山の皆さま、これより先の夢にも、どうぞよろしく願います。いずれにしても近い将来に、フライブルクで、松山で、東京で、Auf Wiedersehen（またお会いしましょう）！

## 東京でのボイアーレ先生

三好泰子・大庭三恵子・金子友子

5月24日の目白でのレッスン。

初対面のコーラス相手のレッスンの、構成に脱帽でした。

先ず、コーラルを聴いて、この2時間半の間に出来ることを診断。難しい発音も、朗読や仕草を動員して指導されると、何だか、ちょっと出来た気に(他のパートの分奏を聴くと、ちゃんとドイツ語みたいに聞こえていました)。減七の和音に、省略された根音を鳴らしてから、各パートを順番に重ねてハーモニーを作っていく。「聞きなさい」という言葉なしに、否応なく他のパートに、一生懸命、耳を澄ますことになる……。発声に対する厳しさ、橋本先生がいつもおっしゃっている事が、よく分かります。プロフェッショナルの、診断と、無限の手法をお持ちです。

最後に、歌い甲斐のある曲を歌わせて、発散！ すっかり音楽した気分になり、気持ちよく帰れました。音楽に大切な事と、指導に大切な事を、一度に学んだ2時間半でした。

(3人とも団員：アルト。桐朋学園子どものための音楽教室講師)

## 松山、フライブルクのバッハ合唱団と《マタイ受難曲》を歌う

菅間 五郎

松山市民会館の大ホールの壇上に立ったとき、まるで夢うつつの状態であった。ドイツとオランダの教会で聴いたあの《マタイ受難曲》を、この自分が、遠来のドイツはフライブルクのバッハ合唱団と一緒にこれから歌うのだと思うと、いやがうえにも気持ちは高ぶった。

昨年東京バッハ合唱団に入団したとき、松山のバッハ合唱団が、姉妹都市であるフライブルクのバッハ合唱団と共演するという話が聞こえて来た。日本語の《マタイ》が曲がりなりにも歌えるようになったらドイツ語にも挑戦してみたいと考えていたところ、松山バッハの方々が先の杉並公会堂の演奏会に大挙して来られた。大村先生から、フライブルクの指揮者はバッハ音楽の秀でた理解者であり、松山での公演に出演させていただくのは費用も時間も掛かるので大変なことだと思うが、今後の勉強のためでもあり、出来るだけ多くの団員が松山に出かけて歌ってもらいたいという趣旨のお話があった。

私は意を決しながらも、松山の団長の橋本さんに恐る恐るのかたちで、松山でウロチョロさせて下さいと打診したところ、どうぞお越し下さいとのお許しを頂いた。心の命ずるままに物事をやるという私の信条に基づいて



ボイアーレ先生(中央)の特別練習を終えて(目白、5月24日)

出かけた松山であったが、幸いなことに松山行きの飛行機が指揮者のボイアーレ夫妻と一緒に、いろいろ話をする機会に恵まれた。その話の中で私は、《マタイ》を歌う経験を十分には持っていないが、歌うときは私の好きなコルマルにあるグリュネヴァルトの磔刑図を思い浮かべているというような話をしたところ、ボイアーレさんから、フライブルクはコルマルからほど近く、《マタイ》に取り組むときは、あそこに行って気持ちを高めることもあるという返事が返って来て、わが意を得たりと思うと同時に親近感さえ湧いて来た。

演奏会の前の5日間の練習は、文字通り夜を日に継ぐハードなものであったが、退屈させられるどころか、これまた文字通りの全身全霊をもってのボイアーレさんの指導は胸を打つものであった。とくに、この1曲を歴史の舞台に譬え、ある時は烏合の衆となり、ある時はイエスを想う敬虔な自分を見出して歌って欲しいとのご指導には感服させられた。

杉並の公演のあと、ドイツ語での歌唱の練習の段になって、私の歌唱力に不安を覚えたのか、これを聴いて家で歌いまくって下さいと言って、団員の吉田さんがバス・パートの練習用テープを貸して下さり、大助かりしたこともこの一文に付け加えておきたい。

私の得意は出会いの人と直ぐに仲良しになることだが、フライブルクのゲイド君、マティアス君と親しくなり、私の経験不足を正直に告白し、助けて欲しいと訴えて、彼等からのサポートを受けたお陰で、不完全燃焼であった杉並での歌唱よりは多少ましなものに変わったと思うこの度の演奏会だった。唯一の失態は、4時間以上も立ち通したために、2部の中頃に差し掛かったときに急に気が遠のくのを覚え、身体が前へのめり、危うく卒倒してしまいそうになったことであった。甲子園を目指して酷暑の真夏に全身を汗まみれにした以来の大汗をかいて、本当に四苦八苦の状態だった。この栄えある合唱を無に帰してはならぬとの一心で歯をくいしばり、最後まで歌い終えることが出来たことは幸いだった。

最後になりましたが、東京、松山、フライブルクの皆様方に対して満腔の敬意と感謝の気持ちを表明させていただきます。私のメールに答える形で、フライブルクの友人から、今回の3合唱団の演奏会が最後のものとならない

ように、とのメッセージも届いていることを書き添えます。有難う御座いました。

思いきや ドイツの民と 声合わせ  
難曲マタイを 口ずさむとは  
付和雷同 人の心の 浅はかさ  
学びつ歌う 受難曲かな  
ゴルゴタの 丘に集いし 民草の  
一人になりて 壺声上げし  
ソロモンの 宮殿ならぬ 松山の  
城下に響く 我がマタイ  
忘却の ユダヤの民に なりきりて  
イエスを殺し 生かしけるかも  
<松山での投句>  
受難曲 歌いて浸かる 道後の湯  
松山に 文化の香り 受難曲

(団員：バス)

### 東京バツハ合唱団《マタイ受難曲》演奏会 『記念文集』 出来ました！

B5判・120ページ、頒価500円(送料とも)

『記念文集』「はじめに」より

東京バツハ合唱団<創立45周年記念>第100回定期演奏会では、舞台上だけでもほぼ200人に上る方々が参加され、それぞれの欠かせない役割を担いました。その顔ぶれの多彩さは驚くべきものです。

この世に生を享けてまだ何年という児童から、何十年もの人生の年輪を心に刻んで来られた方まで。演奏は初めてという方から、その道何十年という達人まで。男性と女性、音域の高い人から低い人まで、アマチュアとプロ、声楽と器楽…。バツハの壮大な設計図と、大村恵美子先生による訳詞のもと、共に豊かで深い音楽を奏でることができた感動は、今も多くの皆様の心に脈打っていることでしょう。・・・

この文集には、この演奏者の多彩さがそのまま反映されています。投稿いただいた140あまりの原稿は、概ね次のように分類されます。東京バツハ合唱団員、松山バツハ合唱団員、児童合唱団員とそのご家族、ソリスト、オーケストラ、団友・後援会員を含む聴衆の方々…。当日のアンケートからの抜粋も掲載。最後に、記録として演奏者の一覧を記しました。楽しんでお読みいただくと幸いです。(記念文集編集委員会)

ご寄稿の方々には、贈呈させていただきました。

「月報」読者の皆様にも、ぜひ御一読いただき、この感動を共有していただければと願っております。

お申し込み：郵便振替をご利用いただくか、直接、事務局までお申し込みください。

## 松山での《マタイ》演奏会に参加して

島津 欣矢

私事、この演奏会には、当初は不参加と回答したのですが、結局は演奏会をご一緒できてよかったと心から思います。ただ案の定、当初不参加の理由であった、仕事との兼ね合いがきつく、前の週5月26日(土)は、午前2時まで仕事、7時の始発で松山へ飛び、10時半からの練習(延べ11時間!)に参加し、演奏会の週末連夜の深夜残業で「本当に週末が本番?」と実感できぬまま、6月2日(土)のオケ合せに赴く有様でした。

いざ練習となると、ボイアーレ先生のあたたかく、博識に裏打ちされた御指導にひき込まれ、11時間もあつという間に過ぎ、大変勉強になりました。

橋本先生が“芳醇なワインの香り”と形容されたフライブルク・バツハ合唱団のひびきを邪魔せぬよう努めました。幸い、お隣のヴォルフガング・ホフさんと意気投合し、練習や演奏会で、本当に寄り添うように歌わせて頂き、助けられ、勉強になりました。小生英語が分らずお話できなかったのですが、この方とお話したバスの吉田さん曰く、幼少時より60余年合唱を続けられ《マタイ》も何度歌ったか知れぬ由、殊にコラールが心に直接ひびき入り、感じ入りました。

演奏会では、時間的に暗譜できず、初めて楽譜を見ながら歌う羽目になり、往生しました(不器用で、指揮に集中して歌うと楽譜を見てられないのです)。暗譜して臨まないと駄目だと痛感しましたが、いい勉強になりました。

この1年半《マタイ》を練習し、演奏会で3時間とおして全曲聴くのは食傷するかと危惧しましたが、実際は、各曲が心に自然になじみ、《マタイ》の素晴らしさを実感しました(本番は立ちっぱなしで、終演後は疲労困憊しましたが…)

さて、頭を悩ませたのが、フライブルクの方々への贈り物でした。5年前に松山で《口短調》をご一緒した際、数名の方から贈り物を頂いたからです(実際は心差し無用と分ったのですが)。結局、5月28日に表参道の古物横丁(?)で、店員さんにも相談して藍の箱染めのハンカチを買い、第1テノールでご一緒させて頂いた4人の方へ、終演後のいきおいでお手渡しできました(迷惑だったか、と気に病みますが…)

末筆ながら、この演奏会の成功に尽力された橋本先生とプロジェクトリーダーの岡田様はじめ松山バツハ合唱団の皆様、ボイアーレ先生とフライブルク・バツハ合唱団の皆様へは、さぞ大変だっただろうとお察し申し上げますとともに、心より敬服し、厚く御礼申し上げます。

(団員：テノール)

【出版協力募金】報告 2007年6月30日現在  
ご応募：65名（ご寄付、楽譜・CD購入など）  
合計額：4,057,000円（以上累計）  
達成率：40.57% 目標 1000万円



## 夏の夕のバッハ音楽

7月28日(土) 午後6時 [開演]

世田谷中央教会 <入場無料>

(東急田園都市線「桜新町」駅下車5分、サザエさん通り)

光野孝子さん(ソプラノ)をお招きして

2曲のソプラノ独唱カンタータ

カンタータ第52番《悪しきこの世よ なれを頼まじ》BWV52

カンタータ第84番《われ足れり わが幸に》BWV84

ヴァイオリンとピアノのアンサンブル

ヴァイオリン・ソナタ 第6番 ト長調 BWV1019より

5声部合唱曲 モテット BWV227《イエス よろこび》

[ソプラノ] 光野孝子

[ヴァイオリン] 丹沢広樹、[ピアノ] 若土規子

[合唱] 東京バッハ合唱団、[指揮] 大村恵美子 / 橋本眞行

### バッハのソプラノ独唱カンタータ

ノイマンのハンドブックには、ソプラノの独唱カンタータとして9曲が挙げられていますが、最近、断片が新たに見つかったようです。うち、教会用作品は BWV51、52、84、199の4曲で、今回とりあげていただく52と84とだけに、合唱の終結コラールが添えられています。

BWV84は、当合唱団でも過去4回の定演で上演し、「50曲選」にも加えられましたが、BWV52は、光野先生による初演を機に、この7月、日本語版楽譜全集の第2回配本として出版されることになりました。

### 野尻湖合宿とコンサート

期間：8月2日(木)～5日(日) <部分参加可>

集合：8月2日16時、(信越線)黒姫駅前

(宿舎まで送迎バスが出ます) <宿舎直行可>

宿泊・練習場所：野尻湖レイクサイドホテル

(長野県野尻湖畔、TEL.026-258-2021)

費用：宿泊・食費(全行程参加の場合24100円)

参加費5000円

交通費各自負担(往復新幹線利用の場合17180円)

演奏会：8月4日(土)19時、国際村・神山教会

(入場無料。上記7/28と同プログラム)

団員以外で参加ご希望の方は、事務局まで、お問い合わせ、お申し込みください。

柳元 宏史

連載：全部おすすめ50曲選!! <その7>

カンタータ第140番

《目覚めよと呼ばわる ものみの声高し》

私にとってこの曲は、くり返し好んで聞いた、思春期を彩る思い出深いもので、耳にするだけで心躍るカンタータである。当時この曲の意味をよく理解することは出来なかったが、日本語による演奏を聞くことによって、この曲がより身近に感じられるようになった。

3月に東京バッハ合唱団は、《マタイ受難曲》を日本語で演奏した。その打ち上げの席で、アルトのソリストをなさった佐々木まり子さんが、「日本語で歌うことで《マタイ》が自分のものになったようです」という趣旨のことを述べておられ、深く共感したことを思い出す。

その後、四国・松山での《マタイ》交流公演(松山/フライブルク両バッハ合唱団の合同演奏)に参加させていただくため、われわれの定演後も、通常練習においてドイツ語による《マタイ》の練習がつづけられた。母語で理解した後に原語歌詞で歌うということが、どれほど味わい深いものであるかを、身をもって体験でき、練習後の充実感はひとしおであった。

松山の演奏会も6月3日に成功裡に終わった。創立45年の歴史的なこの年に、3つの合唱団が一つとなって演奏できたことは、われわれにとって50周年へ向けた、記念すべき大きな“始まり”への第一歩を飾るに、ふさわしかったのではないだろうか。

話を140番に戻すと、この曲は、待降節(アドベント)を迎える直前の日曜日のために書かれた(初演:ライプツィヒ、1731年)。御子イエスの誕生までの4週間は“始まり”までの備えの時である。その待降節を迎える1週前に、この心に染み入るカンタータは演奏されたのである。冒頭合唱の、はずむようなその旋律たるや、心も魂も躍るほどにわくわくする。そして、思わず口ずさみたくくなるようなフレーズがちりばめられている。この作品をとくに印象づけるのは、冒頭(合唱)第4曲 テノール、終曲(第7曲合唱)で、主旋律として歌われるフィリップ・ニコライの有名なコラールであり、曲全体の柱となっている。第4曲の歌詞に み光 明るし とある。

この曲を聴きながら、45周年を迎えた東京バッハ合唱団の“始まり”も、また東京バッハと松山バッハのさらなる友情も、明るく希望に満ちたものであることを確信する。140番は、私たちにとっての希望のカンタータといえるのではないだろうか。

(やなぎもと・ひろし。団員：バス)

CDバッハ・カンタータ50曲選[第16巻]に収録。S光野孝子、T佐々木正利、B宇佐美桂一、東京カンタータ室内管弦楽団、大村恵美子指揮/訳詞、2001年録音(第89回定演)  
演奏楽譜：50曲選[40]